

報 告

日本の児童文学における「死」の表象と
スピリチュアリティ

—— スピリチュアルケアにおける絵本活用の可能性の一考察 ——

鶴生川恵美子¹⁾, 中西陽子²⁾

1) 群馬県立県民健康科学大学

2) 元群馬県立県民健康科学大学

目的：日本の絵本において「死」及び「スピリチュアリティ」はどのように表現され、捉えられているかを分析し、スピリチュアルケアにおける絵本活用の可能性を考察する。

方法：Krippendorff, K の内容分析の手法を用いて、1967年から2016年に発刊された「死」をテーマとした53冊の絵本における「死」及び「スピリチュアリティ」に関する記述について分析した。

結果：54作品はA「死者との共有感」B「超越的存在の探求」C「輪廻転生」D「死の教育的示唆」の四つに分類された。これらの死をテーマとした絵本の多くは、死は完全な消滅ではなく、亡くなった人との関係性の継続を強調しており、死に逝く人及び死別を経験した人が共に、安心した気持ちで死後の世界へ関心を向け、死を受け入れる一助となっている。

結論：このような絵本を、スピリチュアルケアにおいて活用することは、死に伴う悲しみや苦しみを緩和させ、肯定的に死と生を受け入れるよう促すという点で可能である。

キーワード：日本の絵本, 死, スピリチュアリティ, スピリチュアルケア

I. 研究の背景

1980年代における英国のホスピスでのターミナルケアや米国でのがん患者に対するメンタルケアの研究の発展により、クオリティ オブ ライフ (QOL) の概念が発達し、それに伴いスピリチュアリティの概念も発達した¹⁾。

日本においては、元来外国語であるスピリチュアリティという言葉は1990年前後に入ってきており、「宗教性」「精神性」「霊性」などと訳されたが、1990年代後半になり、あえて訳さない「スピリチュアリティ」という語が用いられるようになった²⁾。

スピリチュアリティの意味や定義に関しては、これまでも多くの研究者によって論議されてきたが、統一された見解には至っていない。国籍や文化的背景、歴史的背景、学問的背景など様々な要因の影響を受け、諸説が存在する。しかし、多くの研究者が共通して、スピリチュアリティは宗教とは同義語ではなく、人生の意味や目的を与える根源的なもの³⁾と捉えている。また、スピリチュアリティは、人間に普遍的に与えられたものであり、人間が健康ですべてのことが順調に営まれている時は、隠れていて意識化されず、人間が「生と死」や「生の危機」と直面し、触発されたときに自己喪失、自己崩壊、心の動揺、自己の見失

などによってスピリチュアリティが痛みとして表面化する⁴⁾。一方、他者との関係性を拠り所として、生きる目的・意味を見出し、存在の意味を支持する Well-being の状態として表面化される場合もある⁵⁾とも捉えられている。

1980年代後半から1990年代を通して、医療や看護、社会福祉においてスピリチュアリティという言葉が広く言及されるようになってきた。特に医療・看護の世界では、最先端技術を用いていかなる場合も長生きさせるという近代医学への対抗概念として派生した、いかに「長く生きるか」ではなく、いかに「よく生きるか」という QOL との関わりにおいて、スピリチュアルケアの重要性が説かれるようになり、その根幹であるスピリチュアリティが注目されるようになってきた。それと同時に、スピリチュアルケアやスピリチュアリティに関する研究も盛んに行われるようになってきた。

それらの中で、絵本（物語）を用いたスピリチュアルケアの有効性を述べている研究がある。俣田は近年、「物語」という概念への学問的・臨床的関心が急速に増大しており、その中であって、「物語療法（ナラティブセラピー）」と呼ばれる心理療法及び家族療法のアプローチは、臨床という場における現実の社会的相互行為をとおして物語概念を深化させたという意味で、特に注目に値するとされ、このようにナラティブセラピーによる全人的苦痛の緩和が有効であると述べている⁶⁾。また、鈴木らも代替療法の「読み語り療法」は物語を通して、時間と場所を変える、強い感情を刺激する、コミュニケーションを促す、という機能があるとしている⁷⁾。さらに、井上は絵本・詩はコミュニケーションを促進する道具として有用であり、患者にとって侵襲性が低いため受け入れられやすく、絵本・詩が患者の過去の記憶を呼び戻し、さらに無意識の力、イメージーションの力を賦活すると述べている⁸⁾。これらの研究は、絵本を用いたこ

とにより患者の感情表出を促し、心理的苦痛の緩和や心理的安寧の促進の一助となることを示している。

筆者は、日本に先立ちスピリチュアリティの重要性に目を向けた英米児童文学における「死」をテーマとした児童文学に関する研究に着目し、作品において描かれる「死」とそこから引き出されるスピリチュアリティがどのように表現されているかについての論考を行った。スピリチュアリティの概念が日本に先立ち発展した西欧における、死をテーマとする文学におけるスピリチュアリティに関する研究動向について論文検討した結果、スピリチュアリティに着目した論文はまだ少ないことが分かった⁹⁾。そのような状況下で、死をテーマとした絵本を対象としてスピリチュアリティについて考察した主なものとして、Charles Corr と Nancy Malcom の研究がある。Corr は、死に関連した49冊の児童文学をスピリチュアリティをテーマとして内容分析を行い、「人生の意味」、「関係性」、「超越性」の三つの項目に分類している¹⁰⁾。一方、Malcom は、死をテーマとする児童文学は徐々に増加しているとしながらも、天国やアフターライフに焦点を絞った研究が少ないことから、天国の概念やスピリチュアルな死後の世界の描写に焦点を当てて、児童文学の文章およびイラストに関する内容分析を行っている¹¹⁾。

日本においても、子供の死に対する概念、死生観、死の教育に関する研究は少なく、絵本におけるスピリチュアリティ、そしてスピリチュアルケアにおける活用に関する研究はさらに希少であると思われる。

II. 研究目的

本論においては、前述の米国の研究者らによる研究を参考に、日本における児童文学、特に絵本に着目し、日本の絵本における「死」や「スピリチュ

アリティ」の表象を明らかにすることにより、日本のスピリチュアルケアにおける絵本活用の可能性を考察する。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象

本研究では、児童文学のうち、コミュニケーションを促進する道具として有用でかつ、イメージーションの力を引き出させる絵本に着目して分析を行うため、絵本ナビ*や片桐の研究論文¹²⁾を参考に日本で発売された日本人作家が著した「死」を取り扱った絵本を探索し調べた。購入及び公共図書館の活用により収集された絵本を精読し、1967年から2016年に発刊された、「死」について言及している絵本53冊を研究対象とした。

2. 用語の操作的定義

前述のとおり、「スピリチュアリティ」の意味や定義については統一された定義がないため、本研究において示される「スピリチュアリティ」の定義は、以下の研究者らの定義を参考に示すこととする。

Doka：死に向かって衰える肉体や精神力を受け止めながら、自分の「アイデンティティ」を確保することへの援助がスピリチュアルケアである¹³⁾。

窪寺：死後の生命への関心がスピリチュアリティで、その関心を支えるのがスピリチュアル・ケアの務めである¹⁴⁾。

Cohen：「スピリチュアリティ」は、人間存在の意味や人生の意味にかかわる領域であり、人間の存在意義についての問いかけや、今ここに生きている自分をどのように捉えるかということ¹⁵⁾。

岡本：「スピリチュアリティ」は、人間が生来的にもち超越的なものとの関係のなかで、自己の

存在のうちに見い出す人間の生の側面¹⁶⁾。

石井：人間が「生と死」や「生の危機」と直面、触発されたときに自己喪失、自己崩壊、心の動揺、自己の見失い、などによってスピリチュアリティが痛みとして表面化する¹⁷⁾。

以上をふまえ、本研究では、「スピリチュアリティ」を「人間が生来的にもち超越的なものとの関係のなかで、自己の存在のうちに見い出す人間の生の側面であり、特に危機的な局面に接した際に表面化する、人間の存在意義についての問いかけや、今ここに生きている自分をどのように捉えるかということ、死に向かって衰える肉体や精神力を受け止めながら、自分のアイデンティティの確保、及び死後の生命への関心」と定義する。

3. 分析方法

本研究では、Krippendorff, Kの内容分析¹⁸⁾手法を参考に、収集された絵本の内容分析を行った。

研究対象として収集された絵本を繰り返し精読し、絵本のテーマの根底にある主軸となる概念を明らかにするために、分析対象となる記述に関して、「死」「スピリチュアリティ」を表すパラグラフ、いくつかのパラグラフを構成する文章全体など文脈を抽出した。

1) 抽出した文章を繰り返し精読し、文脈が意味することについて、前後の文脈との関連も考慮に入れながら妥当な推論を加えて解釈し、かつ、隠された主語や目的語などを補いながら、意味や本質が損なわれないように、絵本の物語の中での「死」と「スピリチュアリティ」の概念を記述した。推論を加え解釈をした文脈については、その根拠を併せて記述した。

2) 概念の意味内容の類似性に従い分類し、その分類を忠実に反映した表札ネームをつけ、意味内容を検討し、最終的な表題ネームをつけた。

3) 分析過程においては、この絵本の中での「死」はどのように描かれているか、また、「スピリ

「チュアリティ」はどのように捉えられているかという視点に立ち返りながら、常に絵本と分析結果とを照合し、文脈の意味が適切に捉えられているか、かつ推論が妥当であるかを共同研究者とともに複数回確認した。

IV. 結 果

53冊の絵本（表1参照）の内容分析を行い、本研究で定義したスピリチュアリティの定義に当てはまると考えられる内容を分類したのが、表2である。ただし、53冊の絵本のうち『詩ふたつ』は二つの作品から構成されているため、研究対象の合計は54作品とする。

54作品は大表題として、A【死者との共在感】、B【超越的存在の探求】、C【輪廻転生】、D【死の教育的示唆】の四つに分類された。なお、【 】は大表題、〔 〕は表題、（ ）内は絵本IDの番号であり、本文からの抜粋部分は斜字体で標記する。

A：【死者との共在感】

亡くなった人や動物（以下、亡きもの）の生物学的存在は亡くなくても、亡きものを思い起させる契機となるものは何であるかという視点から、A-1) 亡きものの形見を持つことで亡きものとのつながりを感じる〔形見による共在感〕、A-2) 共有していた時や空間に亡き人の存在を転化することによってつながりを感じたり、目に見えるものでも、見えないものであっても、何らかの象徴的な存在に亡きものとのつながりを感じる〔象徴的な存在による共在感〕、A-3) 亡きもののことを想うという意識的な行為によってつながりを感じる〔想うことによる共在感〕の三つから形成されていた。

A-1〔形見による共在感〕

亡きものの体の一部であったり、生前いつも持っていたものや大事にしていたものを形見として身近に置くことが、残されたものに、その形見

を見るたびに亡きものを思い起こし、そばにいると感じることを可能とさせている。

描写されている形見には、亡くなった動物から作られた馬頭琴(1)、お母さんの顔が映し出される押し葉(10)、飼い犬がよく遊んだおもちゃ(23)、ママのパンツ(51)、などがある。

『スーホーの白い馬』(1)では、大事にしていた白馬を戦いで失ってしまった悲しむスーホに、夢の中で、白馬は次のように語りかける。

「そんなに、かなしまないでください。それより、わたしのほねや、かわや、すじやけを使って、がっきを作ってください。そうすれば、わたしはいつまでも、あなたのそばにいられます。あなたを、なぐさめてあげられます」スーホは、どこへ行くときも、白馬の体の一部で作った馬頭琴を携え、それを弾くたびにスーホは白馬のことを思い出し、じぶんのすぐわきに、白馬がいるような気がするのだった。

『ひとりぼっちじゃないよ』(10)では、自分の死が近いことを知った、いのししの母親は、紅葉の押し葉を自分の形見として子供に持たせようとする。

「おしばをもっていれば、いつもおかあちゃんといっしょなんだ。ひとりぼっちじゃないんだね」と、うりぼうは、押し葉を見るたびに母親がそばにいて感じることができる。

A-2〔象徴的な存在による共在感〕は、亡きものの存在を何に転化しているかという視点から、次の三つから形成されていた。

A-2-1：共有していた時や空間

形見とは異なり、亡きものを形として残ることはできない、生前共に過ごした時や空間に転化された存在として思い起すことが、残されたものに、亡きものをそばに感じることを可能とさせている。

いつも自分のもとへ走ってくる息子とともに共有した夕日の道(5)、生前お父さんと来ていた満

表1 本研究で分析した対象絵本（出版年代順）

ID	著者	出版社	発行年	絵本名
1	大塚勇三	福音館書店	1967	スーホーの白い馬
2	おのきがく	ポプラ社	1970	かたあしだちょうのエルフ
3	やなせたかし	フレーベル館	1975	やさしいライオン
4	佐野洋子	講談社	1977	100万回生きたねこ
5	岸武雄	ポプラ社	1981	けんぼうは1年生
6	大森真貴乃	ほるぶ出版	1987	おばあちゃん
7	梅田俊作 / 梅田佳子	佼成出版社	1991	まんげつの海
8	立松和平	ポプラ社	1992	海のいのち
9	森津和嘉子	文溪堂	1996	月にとんだ猫
10	としまかおり	文溪堂	1996	ひとりぼっちじゃないよ
11	池見宏子	岩崎書店	1997	おばあちゃんといつもいっしょ
12	葉祥明	佼成出版社	1997	ひかりのせかい
13	甲斐裕美	新風舎	1997	ロン
14	森津和嘉子	文溪堂	1998	子猫の気持ちは？
15	井上夕香	国土社	1998	星空のシロ
16	菊田まりこ	学研	1998	いつでも会える
17	近藤薫美子	アリス館	1998	のにつきー野日記ー
18	細谷亮太	岩崎書店	1999	ぼくのいのち
19	武鹿悦子	佼成出版社	2000	あたしのいもうと
20	武鹿悦子	教育画劇	2000	ありがとうフクロウじいさん
21	河原まり子	岩崎書店	2000	天国からやってきたねこ
22	立松和平	くもん出版	2000	街のいのち
23	はらだゆうこ	旺文社	2000	リリがのこしてくれたもの
24	大塚敦子	小学館	2000	さよなら、エルマおばさん
25	いせひでこ	偕成社	2000	1000の風 1000のチェロ
26	福田岩緒	文研出版	2001	夏のわすれもの
27	葉祥明	大和書房	2001	もういちど会える
28	那須正幹	ポプラ社	2002	秋空のトト
29	石亀泰郎	文化出版局	2002	さよならトンボ
30	細谷亮太	岩崎書店	2003	おにいちゃんがいてよかった
31	おぐらひろかず	ポプラ社	2003	しろがはしる
32	木葉井悦子	ビリケン出版	2004	ぼんさいじいさま
33	谷川俊太郎	リプロポート	2004	ふたごのき
34	内田麟太郎	佼成出版社	2004	おじいちゃんの木
35	晴佐久昌英	サンマーク出版	2005	恵のとき 病気になったら
36	指田和子	PHP 研究所	2005	あの日をわすれない はるかのみまわり
37	高橋妙子	あかね書房	2005	小さな小さなおとうとだったけど。
38	どい かや	小学館	2006	うさぎのルーピースー
39	西本鶏介	鈴木出版	2006	おじいちゃんのごらくごらく
40	茨木のり子	福音館書店	2006	貝の子プチキュー
41	のぶみ	岩崎書店	2006	いぬかって！
42	秋元康	講談社	2007	ぞうのせなか
43	湯本香樹実	河出書房新社	2008	くまとやまねこ
44	長谷川義史	講談社	2008	てんごくのおとうちゃん
45	谷川俊太郎	大月書店	2009	死
46	内田麟太郎	岩崎書店	2009	なきすぎではいけない
47-a, b	長田弘	クレヨンハウス	2010	詩ふたつ
48	鈴木まもる	講談社	2011	いのちのふね
49	高野優	主婦の友社	2012	よつつめの約束
50	谷川俊太郎	東京糸井重里事務所	2014	かないくん
51	のぶみ	講談社	2015	ママがおばけになっちゃった！
52	ヨシタケ シンスケ	ブロンズ新社	2016	このあと どうしちゃおう
53	谷口真知子	星湖舎	2016	パパの柿の木

表2 絵本におけるスピリチュアリティの内容分析

スピリチュアリティの概念 (絵本 ID)	表札	表題	大表題
自らが楽器になることで、白馬は飼い主を慰めることができると考え、夢の中で自分の体の一部で楽器を作るように語りかける。その楽器を弾くことによって、飼い主は白馬と一緒にいると感ずることができ、白馬もスーホのそばにいられると感ずる (1)	亡き人 (動物) の形見を持つことで亡き人 (動物) とつながっていると感じる	A-1 形見による共在感	A 死者との共在感
いのししの母親が死を前に紅葉の押し葉を自分の形見として持たせようとし、押し葉を覗くと母親の顔が見え、子供 (うりぼう) は母親といつも一緒にいると感ずる (10)			
飼い犬が生きていた時に大事にしていたおもちゃの整理をしながら、犬との思い出を共有することで、その存在を忘れないと感ずる (23)			
おじいちゃんの麦わら帽子をかぶって振り返った先が広がったひまわり畑をおじいさんからの贈り物のように感じ、ひまわりのように明るく上を向いて生きるという気持ちを抱かせることで、おじいさんがそばにいるように感ずる (26)			
死んでしまったママは空の上にいると言われ、ママのパンツをはいて眠ることで、ママがそばにいるように感ずる (51)			
夕日を背に自分の方に手を広げて飛んでくるときの生前の姿を、今でも家の見える夕日の道に來ると思い出し、息子 (けんぼう) の下駄の音や声まで聞こえるような気がして、息子がそばにいるように感ずる (5)			
生前に教えてもらった満月の夜の岩場は、子供たちにとって父親と共有した秘密の場所であり、父親と会えるように感ずる (7)	A-2-1 共有していた時や空間に亡き人の存在を転化する	A-2 象徴的な存在による共在感	
父親を死に追いやった大魚のクエを海の中で見出した時、父親をクエと感ずることによって海に潜れば父に会えるように感ずる (8)			
いつも祝っていた家族団らんの空間で、お兄ちゃんの記念日 (誕生日) を、生前と同じように祝うことで、亡き人の存在を感ずる (30)			
死んでしまったおじいちゃんを散歩していた思い出の場所を犬のしるしと一緒に走ることで、おじいちゃんがそばにいるように感ずる (31)			
空や雲、風などの自然の中、生前亡き人が歩いていたであろう街角などに亡き人を思い出しそばにいるように感ずる (46)			
死んでしまったただだちのエルフが空に向かって生える大きな木となり、生前と同様に他の動物たちの憩いの場を提供することで、動物たちはエルフを象徴したような木の下で涼みエルフとともにいるように感ずる (2)	A-2-2 目に見えるものにも亡きものの存在を転化することによってつながっていると感じる		
夜空に白く輝く星を見て、死んでしまった母親猫の声が聞こえるように感ずる (14)			
死んでしまった犬のシロは、星になってきらきら瞬き、この星を見ることによってシロのことが思い出され、みんなの心の中に生きていると感ずる (15)			
秋空に浮く雲に死んでしまった犬のトトに似た雲を見つめ、空を見上げることによって犬を思い出し、そばにいるように感ずる (28)			
ひいおじいちゃんが植えた木に会いに行き、モンちゃんも木を植えることで、世代を超え亡き人とつながっていると感じる (34)			
地震で亡くなった少女が見つけ出された場所に咲いたひまわりを亡き少女の生まれかわりと思うことで、そばにいるように感じ、悲しみを乗り越え、悲しみとともに前に進んでいけると感ずる (36)			
パパが生前植えた柿の木をその人そのものと思うことで、亡き人が見守っていてくれると感ずる (53)			
雲の中にキラッと光る光が、まるで亡き妹が返事をしているような気がして、思い出しさえすればどこにもいてくれると感ずる (19)			
チェロを弾きながら、その音の中に死んでしまった犬を抱きしめているような気持ちになり、楽器の音の中に亡き犬の存在を感ずる (25)	A-2-3 目に見えないものにも亡きものの存在を転化することによってつながっていると感じる		
死んでしまったお父さんゾウの言葉を思い出すことで、その言葉がまるで声となって聞こえるような気がして、いつもそばにいると感ずる (44)			
死んでしまった人のことを思うことで、いつも一緒にいられると感ずる (16)	思うという意識的な行為によって亡きものの存在を感ずる	A-3 思うことによる共在感	
死んでしまった猫のジーコとの二人だけの夢の中という秘密の時間で思い出すということによって、いつも一緒にいるように感ずる (21)			
仲よくなった小鳥が死んでしまっても一緒にいた楽しかったことを思い出し、ずっと友達として一緒にいるように感ずる (42)			
亡くなった人は、人の中に記憶を残してゆき、いつでもそばにいて感ずる (47-a)			
死んだら空へ飛んでゆき、そこで大好きな人と一緒に永遠にいられると感ずる (3)			
亡くなったおばあちゃんは、星の一つであったり、天国にいて感ずることによって、この世で生きていなくても存在しているように感ずる (6)			
亡くなったおばあちゃんは、遠くへ旅立たと考えることによって、その場にはいなくても生きていられるように感ずる (11)			
	別の場所に生きていると感ずることによって亡きものの存在を感ずる	B-1 死後の世界の存在	B 超越的存在の探求

<p>病気で亡くなった子供が『ここの世界』に来たことを説明する。いのちは自然や大きな命の一部であり、いつか再開できることを示唆することによって、死が永遠の別れではなく、永遠の命の連続とつながりであると感じる (12)</p> <p>フクロウおじさんは冷たい身体を残して死んでしまったが、旅立っていった魂は別の場所に行き、そこで存在すると感じる (20)</p> <p>亡くなる直前に3か月前に死んだ飼い犬の姿を見たというおばあちゃんは死んでしまったが、愛犬と同じ場所にいると思うことによって、その存在を感じる (24)</p> <p>死んでしまったボクが、死んでしまっても近くで一緒に生きていることを両親に伝える (27)</p> <p>ほんさいじいさんは寿命を迎え、自然が姿を変え迎えに来たひいらぎ少年に守られて旅立って行くのは、その先の世界で生きていくと感じさせる (32)</p> <p>生前おじいちゃんやさんが楽しんでお風呂でよく言っていた「ごらく」という言葉を思い出すことによって、おじいちゃんが瀬菜という場所にいると感じる (39)</p> <p>空に向かって、死んでしまった鳥に自分の気持ちを伝えることによって、空の向こうの世界に鳥がいると感じる (41)</p> <p>家の前で「大丈夫か」と声をかけてきた死んでしまったお父ちゃんは、天国にいて、いつも見守ってくれていると感じる (43)</p> <p>死んで身体はなくなってしまうとしても魂が残る、亡くなった人の存在を感じる (45)</p> <p>亡くなった人は空の上からみんなを見守っていると感じることによって、その存在を感じる (49)</p> <p>亡くなった人は、天国に行き、不自由なく暮らせること、そして身の回りのいるいるものによって家族を見守ってくれると感じる (52)</p> <p>死後は、天国に行き、天の親である神の子となる (35)</p> <p>亡くなった赤ちゃんは天国に上り、神の使いとして天使になる (37)</p> <p>満月の光の中に殴りこまれていく夢の中で、森の奥に消えて帰ってこない猫のヒメはフクロウの子供となって甦ったのだと感じる (9)</p> <p>死を間近にした犬のロンが、少年に死後も自分のことを覚えていて欲しいことを伝えたのち、母親の名を呼びながら母親のお腹の中へ戻っていく (13)</p> <p>今年生まれたトンボも季節の移り変わりとともに身体が衰え、最後にクモにとられ死んでしまったが、また新しい命が誕生する (29)</p> <p>動物は死骸となった身体を土に返すことによって、野菜を育てる土となり、その野菜は生きていく動物を生かすための食物となっていく (38)</p> <p>貝のプチキューが死に、その死骸を食べてしまったカニの子が、食べてしまったことを嘆くものの、いずれも海に住む者同士がその生を分かち合うために命がながる (40)</p> <p>木を一本と植えていくうちに、林から森へと変わり、その場所がやがて死んでいく私たちが再び出会う場所となる (47-b)</p> <p>病気が高齢などで亡くなった人々やかわいられていた動物たちは鳥のかたちをした舟に乗って大きな雲の中に入り、再びに新しい命となり舟のおなかからコウノトリによって世界中に運ばれていく (48)</p> <p>晩秋に小動物が死に、次第に朽ち果て、その土地が一面花に埋め尽くされた時、死んでしまった生き物が別の新たな生命とつながっていると感じる (17)</p> <p>時間の流れとともに、変わってゆく街にあふれる自然を見ることによって、時がたっても命が継続しているという生命の気配を感じる (22)</p> <p>亡くなったおじいさんを生前から見ていたふたごの木、亡くなったおじいさんは自然の一部になったとその存在を感じる (33)</p> <p>何回も生き延びてきた死の現実感のない猫が、ずっと一緒にいたいと思いたった白い猫の死に直面し、生は永遠ではなく限りあるものであることに気づく (4)</p> <p>小児病棟で友達の死を経験しながら、生きている世界や自然の世界が普通の姿で迎え入れてくれる事実気づき、生の意味について考える (18)</p> <p>死を間近にしたおじいさんから聞いた同級生の早すぎる死と、その友についての未完成で残された絵本を読み、孫娘が死について考える (50)</p>	<p>神とつながり、死後は天国に存在すると感じる</p> <p>B-2 神とのつながり</p>	<p>1つの死が別の生を再生し、永遠につながっていくと感じる</p> <p>C-1 永遠につながる命の連続</p>	<p>自然とのつながりを感じ、生の意味を考える</p> <p>C-2 自然に見る命の連続</p>	<p>死の体験がもたらす生の意味</p> <p>D 死の教育的示唆</p>
--	---	---	--	---------------------------------------

註) 『時ふたつ』(47) は、2つの物語から成るため、2冊分とし、それぞれを a、b と表す

月の夜の岩場 (7), 父を死に追いやった大魚クエのいる海 (8), お兄ちゃんの誕生日を祝っていた家族団らんの空間 (30), などである。

『けんぼうは一年生』(5)では、息子の死後3年もの月日経っても、お父さんは、「ゆうやけのそらに とんだしゃぼんだまのように あっというまに きえてしま」ったけんぼうが夕日を浴びて手を広げて飛んでくるのを待っている。家が見える夕日の道は二人が共有していた大事な時間と空間であり、「おとうさんには あおいはなおのげたがみえるのです。かわいたのみちにひびくおとがきこえます。『おとうちゃん、きえてしまっちはいや!』という こえまでも…。」とあるように、夕刻、家が見える道に来るたびに、お父さんには、けんぼうの声や歩く下駄の音が聞こえたり、下駄の鼻緒さえ見え、息子をそばに感じることができる。

A-2-2: 目に見えるもの

亡きものを視覚的に把握可能な別なものに転化された存在として見ることで、残されたものに、亡きものをそばに感じることを可能とさせている。

死んでしまっただちちょうのエルフの姿をした木 (2), 夜空に輝く星 (14) (15), 雲の中にキラッとひかる光 (19), 秋空に浮かぶ飼い犬に似た雲 (28), 亡きパパが植えて残した柿の木 (53), などである。

『かたあしだちちょうのエルフ』(2)では、クロヒョウから子供たちを助け死んでしまっただちちょうのエルフは、空に向かって生える「エルフとおなじかつこうですばらしく 大きな木となって、のはらに一年じゅう すずしい 木かげをつくり」動物たちを見守る存在となることによって、他の動物たちは、エルフをそばに感じることができる。

『秋空のトト』(28)では、飼い犬のトトが死んでしまっただけでなく、歩いた散歩道、ふと見上げた秋空の中にむくむくと浮かぶ小さな

雲の中に「トトとそっくりの雲」をミカは見つける。「トトそっくりの雲は、なみだでばやけてしま」うほど、トトを思い出させる存在となる。

A-2-3: 目に見えないもの

亡きものを視覚的に把握できない別のものに転化された存在として見ることで、亡きものをそばに感じることを可能とさせている。

音楽を奏でるチェロの音 (25), お父さんゾウの言葉 (44), などである。

『1000の風 1000のチェロ』(25)では、「あのこのまわりにとりがまう。フロルのこえをきいているんだらうか。ぼくはみえない犬をだきしめてひいた」というように、チェロを弾きながら、その音の中で死んでしまった犬を抱きしめているような気持ちになり、楽器の音の中に亡き犬の存在を感じている。

『ぞうのせなか』(44)では、「てんごくにいくらしいけど、ほんとうのことは わからない。おとうさんもはじめてだからね。」「ポッポにはみえなくても、おとうさんは ずっと ポッポの そばに いるよ」「おとうさんは ずっと ポッポの そばに いるよ」と、死に直面しているお父さんが子供に繰り返し語りかける。「ポッポは いつも この ことばを おもいだし、そんな ときは ほんとうに おとうさんが そばに いるよな まが」するとあるように、お父さんの言葉の中に、亡き父の存在を感じている。

A-3[想うことによる共在感]

亡きもののことを「想う」という意識的な行為が、残されたものに亡きものをそばに感じることを可能とさせている。

亡き人を想ったり (16), 夢の中という秘密の時間の中で思い出したり (21), 死んでしまった小鳥との楽しかったことを思い出したりする (42), などである。

『くまとやまねこ』(42)では、仲よしだった小鳥が死んでしまっても、「ことりといっしょにした

たのしかったことを、ひとつひとつおもいだし、『ぼく、もうめそめそしないよ。だって、ぼくとことりはずっとずっとともだちなんだ』と思うことによって、死んでしまった小鳥がずっと友達として存在すると感じる。

上記のように、【死者との共在感】のカテゴリーに属する作品は、亡きものを想うことによって、その思い出の中に亡きものの存在をそばに感じ、いつまでも共にいると感ずることが可能となることを示していた。

B：【超越的存在の探求】

亡きものが別の世界に生きていると感ずることによって亡きものの存在を感ずる、B-1)〔死後の世界の存在〕と、亡きものは神とつながり、死後は天国に存在すると感ずる B-2)〔神とのつながり〕の二つから形成されていた。

B-1〔死後の世界の存在〕

亡きものが死後においても現実世界とは別の超越的な世界で存在すると思えることが、亡きものを死後でも生きてそばに感ずることを可能とさせている。

〔死後の世界の存在〕において示される「別の場所」とは、地上から見上げる位置を示す「空」(3) (41) (49), 「星や天国」(8) (43) (52) と、現実世界から離れた遠い場所を示す「魂が旅立った別の場所」(11) (20) (32) (45), 「こっちの世界」(12), などである。

『おじいちゃんのごくらくごくらく』(39)では、『ごくらくってなに?』ってたずねたら『しあわせなきもちになることだよ』とおじいちゃんがいきました。おじいちゃんとおわかれのひ、ぼくがないと、おかあさんがぼくをだきしめていきました。『おじいちゃんはおとけさまのくにもごくらくごくらくといっけてくらししているのよ』とあるように、亡きものは死後に極楽に行き、

幸せに暮らせると、母親が子供に話すことによって、子供は祖父の死を受け入れることができる。

『このあと どうしちゃおう』(52)では、おじいちゃんが死ぬ前に残したノートには、「死んだあといく天国では『なんでもあるし、何でもできる』みんなを見守っていく方法には、つきになって、かさぶたになって、りんごになって、』というように、身近なものになって死んでもいつもそばに感ずることが書かれていた。亡くなった人は、天国に行き、不自由なく暮らせること、身の回りのいろいろなものになって家族を見守ってくれると感ずる。

B-2〔神とのつながり〕

B-1)において示された天国について言及している絵本と区別し、「神の子」あるいは「神の使い」である「天使」となり、超越的な存在である神とつながっていると思うことが、亡きものを死後でも生きてそばに感ずることを可能とさせている。

天国に行き神の子となる (35), 天国に上り天使になる (37), がある。

『恵のとき 病気になったら』(35)では、病気になった時こそ、恵の時であると考え、「天に向かって思いのすべてをぶちまけ…この私を愛して生み 慈しんで育て わが子として抱き上げるほほえみに全てをゆだねて手を合わせよう…そしていつか 病気が治っても治らなくても…天の親に抱きしめられて自分は神の子だと知るだろう、とあるように、死後は天国に行き、天の親である神の子となり、全てを委ね安心していただけることが示されていた。

上記のように、【超越的存在の探求】のカテゴリーに属する作品は、死後には天国や極楽といった超越の世界が存在し、超越的な存在である神のもとに感ずることを求めることによって、死者はその別の世界で生きていると思えること、また、神

に召されて神の子や天使として生きていると思えることが、死を受け入れることを可能とさせていることを示していた。

C：【輪廻転生】

亡きものは、別の生き物となってその生命を引き継いでいると感じたり、自然の中で亡きものの存在を見出すことによって、残されたものが、姿がなくてもその命が永遠につながっていると感じることを可能としている。

一つの死が別の生を再生し、永遠につながっていくと感じる C-1〔永遠につながる命の継続〕、自然とのつながりを感じ、生の意味を考える C-2〔自然に見る命の継続〕の二つから形成されていた。

C-1〔永遠につながる命の継続〕

フクロウの子供となって甦る森の奥に消えてしまった猫のヒメ (9)、死の過程で母親のお腹の中へ戻っていく犬のロン (13)、死んでしまったトンボの後に誕生する新しいトンボの命 (29)、一つの生を終え、新しい生命と生まれかわる人や動物を乗せ、雲の中へと消えていくふね (48)、などである。

『さよならトンボ』(29)では、おかあさんトンボが卵を産み、生まれてきたトンボたちがともに生き、季節も冬になるころ待ち構えていたクモの餌食となり死んでいく姿が描かれる。「さよならトンボ さようなら。でも…らいねんになったらまた会えるよね」という最後の表現は、再び命が誕生し、永遠に命がつながっていることを示している。

『詩ふたつ』(47 - b)では、一本の木が林から、森へと変わり、その場所がやがて死んでいく私たちが再び出会う場所となるというように、命は永遠に継続していくとしている。

「何もないところに、木を一本、わたしは植えた。それが世界のはじまりだった。次の日、きみがやってきて、そばに、もう一本の木を植えた。木が二

本… 木が林になった。三日目、わたしたちは、さらに、もう一本の木を植えた。木が三本。林は森になった。とある日、黙って森を出てゆくもののように、わたしたちは逝くだろう。わたしたちが死んで、わたしたちの森の木が天を突くほど、大きくなったら、大きくなった木の下で会おう。」

C-2〔自然に見る命の継続〕

一つの動物の死が時の経過とともに新しい生命の糧となる (17)、生前の姿から亡くなるまでを見守るふたごの木 (33)、などである。

『のにつきー野日記ー』(17)は、文字がなく絵のみで表現されているが、晩秋に小動物が死に朽ち果てた後、一面に埋め尽くされた花の中に、別の生命が誕生していく様子が描かれている。

上記のように、【輪廻転生】のカテゴリーに属する作品は、死んで肉体は滅びても、別の形になって蘇る、あるいは、新しい命となって誕生することによって、命が永遠に引き継がれると感じることができるということを示していた。

D：【死の教育的示唆】

死という体験によって生きることを読者に考えさせる機会を提供する。

死ぬのなんか平気と思っていた「死」とは無縁のねこが愛しい白ねこの死に直面し、死とは二度と生き返らないことであるということ学び、「死」を意識する (4)、昔死んでしまった同級生を思い出しながら、自分の死を迎えようとしているおじいちゃんの死を前に孫娘が「死」について考える (50)、などである。

『100万回生きたねこ』(4)では、「ねこは、しぬのなんかへいきだったのです」とあるように、主人公の猫は何回も生き延びた強い猫として描かれている。死とは無関係であると思っていた猫が、ある日出会った白い猫に対していつまでも一緒に行きたいと願うことによって、初めて愛する者が

死んでいなくなってしまうことについて考える。

「…猫は白い猫といっしょにいつまでも生きていたいと思いましたが、ある日、白いねこはとなりでしずかにうごかなくなっていました…。ねこはもう、けっしていきかえりませんでした。」と終り、猫が白い猫の死によって命に限りがあることを知り、愛や悲しみなどの感情を初めて抱かされるということを示していた。

『死』(45)では、おじいちゃんが亡くなった時の私の気持ちを通じて、死とは何か語られる。お葬式が終わり、おじいちゃんは灰になっていなくなっても、「いなくなった気がしない」と感じる主人公の私。写真の中のおじいちゃん、絵手紙の中のおじいちゃんの絵や文字、ビデオの中のおじいちゃんの声、そういうものに「私がココロを動かされるのはそこにきっと おじいちゃんのタマシイのエネルギーがはたらいているからだ」と感じる。死んだ後のことはわからないから死が怖いと感じるのであり、「もしカラダが死んだあと、タマシイは死なないと信じる事ができたら、まだわたしというエネルギーがつづいていると思えたら、死んだあとの世界に興味がわいてくる」と、読者に「死」がどのようなものであるかを肯定的な言葉で語っていた。

上記のように、【死の教育的示唆】のカテゴリーに属する作品は、読者に死について考える契機を与え、「死」を恐れることなく前向きに捉え、死とともに生についての関心を持つことへと導いていることを示していた。

V. 考 察

1. 日本における死をテーマとした絵本の特徴

54 作品の内容分析において、最も多くの作品にみられた A【死者との共在感】は、亡きものを思い起こさせる「形見」や、形見以外の何か象徴

的な存在に転化された「目に見えるもの」あるいは「目に見えないもの」から、残された人々は、亡きものの生前の姿を思い起し、それによって、亡きものとの関係性の継続を確信することが、残されたものへの安堵感につながることを示唆していると言える。同様に、『スーホーの白い馬』(1)や『ロン』(13)などのように、死に逝くものや死んでしまったものからの視点から描かれた絵本の場合、死に逝く人にとっても、死後生きている人々との関係性の継続を信じられることが、安心して死を迎えることの一助となっていることが示されている。

次に多くの作品にみられたのは、B【超越的存在の探求】であり、死後の世界や神とのつながりについて表現されていた作品群であった。

Malcom は、死をテーマとする児童文学における天国の概念やスピリチュアルな死後の世界の描写に焦点を当てた内容分析において、半数以上の絵本が天国とスピリチュアルなアフターライフ(afterlife)について述べ、天国は頭上、空のどこか高いところ、雲の合間かそれより上にあると表現されていることを示した。さらに、9割近くのアメリカ人が天国やスピリチュアルなアフターライフを信じているという調査結果についても言及している¹⁹⁾。このことから、Malcom が研究対象として扱った絵本のうち半数近くにおいて、天国やスピリチュアルなアフターライフが描写されていることは、アメリカ人の天国やアフターライフについてのキリスト教的信仰が大きく影響していると考えられる。

一方、本研究で扱われた日本作家による絵本においては、「天国」という表現を使っている絵本は54 作品のうち4 作品と少なく、その一因は、欧米と日本における宗教観の相違であると言える。しかし、日本における天国に相当する「極楽」や本研究において別の場所で生きていることを示すとして考えた「星」「空」などをアフターライフと

して捉えたとすれば、それは、英米及び日本の絵本に共通した、東西を問わず人間が普遍的に抱いている死生観の一つとして捉えられるであろう。また、宗教に関わらず、天国や神といった現実世界を超えた世界や存在に依存することによって、亡きものとの関わりを感じ、安堵感を得ているとすれば、このことは、宗教に関わらないスピリチュアリティの一面といえるかもしれない。

次に多くの作品にみられたC【輪廻転生】では、自然や動物などを題材にして永遠の命のつながりを描いた作品が多い。「自然」もある意味、超越的な存在の一つとして考えることが可能であるが、本研究では、上記の天国や神など宗教的な存在と区別して考えることとした。

子供の生と死に対する意識について3歳から15歳の子供を対象に調査をした杉本は、6歳から8歳の7~8割の子供たちは、死の普遍性（人は誰でも死ぬ）や死の不可逆性（生き返ることができない）について理解し、ほぼ死の概念的理解が形成されるとしているが、年齢が高くなるにつれ、死後の世界や魂といった霊的・精神的回答や、輪廻転生などの「生まれかわり思想」を挙げる割合が高くなり、死の概念的理解が形成されたうえでの想像的、あるいは哲学的な死の捉え方をしていると考察している²⁰⁾。仲村は「生まれかわり思想」は日本の文化的影響による特徴としており、この年齢の子供たちが死の概念の確実な理解を遂げている年代であることから、このような考えによって死への恐れを打ち消しているのではないかと述べ、さらに空想や創造の世界に思いを巡らせることの重要性についても述べている²¹⁾。

このことは、死の不可逆性は理解していても、命の継続、亡きものが生まれかわって別の命となって誕生すると考えることによって、死に直面している人々及び死別を経験し、死に対して恐怖や不安を感じている人々は、安堵感を持つことができるということを示唆していると言える。

最後のD【死の教育的示唆】として分類された作品は、生きているものが、死の普遍性、死の不可逆性を理解しつつも、死後の世界や魂の存在等の表現によって、死は完全な消滅ではないことを認識し、肯定的に死について、そして同時に生についても考える契機を提供し、ひいては死に対する恐怖を最小限にし、肯定的に捉えられるよう導いている。

中学生を対象に『100万回いきたねこ』を題材として「死」についてのディスカッションをさせた授業についての高橋の研究²²⁾にもあるように、この絵本は、絵本を読み終わった時、その後猫が死について考えるのではないかと読者に思わせることによって、読者も同時に「死」について考えるように導いていくという教育的な役割を持っていると言える。

本研究から、死は完全な消滅ではなく、多様な形で、亡くなった人と生きている人との関係性が継続されると感じることが、死に逝く人にとっても残される人にとっても、両者が共に安心した気持ちで死を受け入れることの一助となっているということが示唆される。そして、両者が共に、「死後の世界」へ関心を向けることが、生や死における自己の「アイデンティティ」の確保につながることを示していると言えるのではないだろうか。

2. スピリチュアルケアにおける絵本活用のメリット

Angelaは、文学作品を読みそれに反応することによって、愛する人を亡くすというようなトラウマ的な出来事に対処する読書療法(bibliotherapy)において、絵本の活用が有効的であり、これによって、子供たちは登場人物と個人的な関係を築き、物語の様々な要素と関係しあい、読者自身の各々の感情に対処させることができる²³⁾としている。また、片桐は、喪失体験をした子供のグリーフケアにおいて、大人と子供の時間と空間の共有によ

るコミュニケーションの促進により感情を共有し共感しあう機会を創り出す働きを備え持つものとして絵本の重要性を述べている²⁴⁾。

加えて、Angela は、子供のための絵本は、意味が絵と言葉で伝えられるという点で他の文学と異なり、死が文字とイラストの両方で描写されるという方法に注目することが、子供の悲しみを支援するために絵本を選択し活用することにおいて重要である²⁵⁾とも言及している。

このように、絵本が絵と文字から成り立っているという特徴を活用することによって、死んだはずの人や動物がまるで生きていたかのように描かれることや、天国や天使のイメージなど、現実世界ではありえない描写しにくい場面を表現することが可能となり、それが読者のイマジネーションを賦活させる。本研究で扱った絵本の中においては、空へと飛んでいくライオンとその育て親の老犬（『やさしいライオン』）、家族にとって形見となった柿の木にうっすらと描かれるお父さん横顔（『パパの柿の木』）、死んだはずのお父さんと再会する時のいつもと違うモノクロの背景（『てんごくのおとうちゃん』）などが代表的な例である。

本研究の分析の結果を導いたように、亡くなった人や動物がいつもそばにいて見守ってくれたり、天国のような死後の世界が空の上にあるといった想像的発想に基づいた精神性を引き出し、スピリチュアルな世界を理解しやすく表現するのに絵本は優れた媒体であると考えられる。

3. 絵本を活用したスピリチュアルケア実践の可能性

終末期の子どものスピリチュアルペインの表出について子どもを亡くした親の手記および終末期の子どもの様子を詳細に記述した論文を分析対象として調査した美馬の研究では、子ども達は死後の世界について「死んだらどうなるのか、怖いところに行くのだろうか、良いところにいけるのだ

ろうか」といった問いを親に発していたことが明らかにされている。また、「死んでも両親に会いたい、本当に会えるのか」といった不安を抱いていたことも報告されている²⁶⁾。本研究において、対象とした絵本の多くが、死後の世界の存在を描写しており、死んだ者は現世界では生きることができないが、別の世界で存在していることを示唆している。また、姿は見えなくとも、死んだ者の存在は身近にあるということも示唆している。このことは、まさに、終末期の子どものスピリチュアルペインの表出への答えが絵本にあると言及できるのではないかと考える。

また、末期がん患者は様々な全人的苦痛を抱えているとされ²⁷⁾、患者の苦悩の「外在化」を起こし自己内対話を促進する媒体として物語の効果が報告されている²⁸⁾。また、成人患者に対する絵本を活用した物語療法による効果を報告した矢部は、「物語療法には患者自身の心のありようを物語に託して比喩的に提示することで患者に気づきをもたらす効果がある」と述べている²⁹⁾。患者も医療者も死が近いことを認識しながら「死」について間接的・直接的に話すことは難しい³⁰⁾。このような状況において、絵本を活用することにより、患者のスピリチュアリティの表出を促し、スピリチュアルペインを緩和し、Well-being の側面を引き出すことが可能であると考えられる。

このように、「死」をテーマとする絵本は、子どもだけでなく大人のスピリチュアルケアに関して、活用することの意義があると考えられる。

VI. 研究の限界と展望

本研究は Krippendorff, K の内容分析の手法を用いて、絵本に描写されている表現に推論をかけたものを分類していったが、その推論には研究者の主観が入るため、研究者ごとにその分析結果が異なることが推測される。Corr も 2004 年の論文に

において、その分類方法が研究者によって異なり³¹⁾、一つの作品の中に複数のスピリチュアリティのテーマが盛り込まれている場合もあり、その限界がある³²⁾と述べていることから、このような内容分析に関しては、常に同様な問題点が伴うと言える。それでも、本研究から得られた概観は、今後のさらなる研究を進めるうえでの一つのステップとしての意義があると考えられる。

また、本研究において扱った日本の絵本における死やスピリチュアリティは、その概念が西洋から遅れて導入され、西洋のキリスト教による多大な影響も受けていることから、純粋な日本の文化的背景によるものとは断言できない。したがって、今後、日本人の宗教観に関する歴史的背景を、キリスト教の影響を受けている欧米の人々の宗教観とともに概観しつつ、日本及び欧米の絵本の作品についての比較検討を行うことが、日本作家による死をテーマとした絵本におけるスピリチュアリティの特徴、及び日本におけるスピリチュアルケアの一つとしての絵本活用の有用性をより明確にするうえで必要ではないかと考える。

註

*絵本ナビ：子どもに絵本を選ぶための情報を集めた参加型絵本紹介サイト。児童書出版社から提供された絵本の画像や内容紹介の紹介とともに、メンバー登録者の絵本の感想も提供している。

引用文献

- 1) 石井八恵子 (2003): 文献からみるスピリチュアリティへの関心の高まり, ホスピスケアと在宅ケア, 11(3): 288
- 2) 安藤泰至 (2008): 「スピリチュアリティ」概念の再考, 東洋英和女学院大学死生学研究編, 死生学年報, 4: 7
- 3) 藤井美和 (2000): 病む人のクオリティオブライフとスピリチュアリティ, 関西学院大学社会学部紀要, 85: 36
- 4) 前掲書 1), 296
- 5) 今村由香 (2002): 終末期がん患者のスピリチュアリティ概念構造の検討, ターミナルケア, 12(5): 425-434
- 6) 俣田徹 (2002): 社会調査に対する物語療法の方法論的含意 (一般), 愛知県立看護大学紀要, 8: 41-45
- 7) 鈴木美千代他 (2009): がん終末期における絵本読み語りによる患者家族の感情の表出を促す援助, 日本看護学会論文集成人看護Ⅱ, 39: 303
- 8) 井上実穂 (2009): 全人的苦痛を抱える終末期患者の「物語」の紡ぎ方～絵本・詩による新たなケアの可能性を探る～, 死の臨床, 32(2): 218-219
- 9) 鶴生川恵美子 (2019): 英米児童文学における「死」の表象とスピリチュアリティー Charles A. Corr の文献 (2004) を中心に— 育英短期大学研究紀要, 36: 41-54
- 10) Corr, Charles A. (2004): Spirituality in Death-related Literature for Children, *OMEGA*, 48(4): 365-381
- 11) Malcom, N.L. (2011): Images of Heaven and the Spiritual Afterlife: Qualitative Analysis of Children's Storybooks about Death, Dying, Grief, and Bereavement, *OMEGA*, 62(1): 53
- 12) 片桐史恵 (2005): 絵本から学ぶ生と死 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, 6: 114-118
- 13) Doka K. J (1993): Spiritual Needs of the Dying. Death and Spirituality, 143-150, Baywood Publishing Company, New York
- 14) 窪寺俊之『スピリチュアルケア入門』, 27, 三

- 輪書店, 東京
- 15) Cohen,S.R., Mount,B.M., Tomas,J.J.N., et al. (1996): Existential well-being is an important determinant of quality of life. Evidence from the McGill Quality of Life Questionnaire, *Cancer*. 77 (3): 576-586
- 16) 岡本宣雄 (2010): スピリチュアリティを焦点としたケアのアプローチモデルに関する研究 —パストラルケアにおけるアセスメントの研究史から—, 川崎医療福祉学会誌, 20(1): 89-97
- 17) 石井八恵子 (2003): 文献からみるスピリチュアリティへの関心の高まり, ホスピスと在宅ケア, 11(3): 296
- 18) Krippendorff, K, 三上俊冶 (訳) (1989): メッセージ分析の技法「内容分析」への招待, 20, 勁草書房, 東京
- 19) 前掲書 11), 55
- 20) 杉本陽子 (2001): 子どもの「生と死」に対する認識, 日本健康医学学会雑誌, 10(1): 7
- 21) 仲村照子 (1994): 子供の死の概念 発達心理学研究, 5(1): 68
- 22) 高橋和久 (2005): 「生と死の教育」に関する実践的研究～総合的な学習の時間におけるデス・エデュケーションの取組を通して～, 道徳と教育, 49: 5-14
- 23) Angela M. Wiseman (2013): Summer's End and Sad Goodbyes: Children's Picturebooks About Death and Dying *Children's Literature in Education* 44(1): 3
- 24) 前掲書 12), 113
- 25) 前掲書 23), 4
- 26) 美馬里彩 (2010): 終末期の子どものスピリチュアルニーズ—ソーシャルワークの視点から家族へのケアを含めたトータルケアを目指して— 関西学院大学社会学部紀要, 110: 119-145
- 27) 村田久行 (2002): スピリチュアルペインをキャッチする, ターミナルケア, 12(5): 420
- 28) 前掲書 8), 219
- 29) 矢部みゆき (2012): 物語療法が奏功したと考えられる中年期発症の摂食障害男性例, 臨床精神医学, 41(2): 225
- 30) 鈴木志津枝 (2009): 成人看護学緩和・ターミナルケア看護論, 109-112, ヌーベルヒロカワ, 東京
- 31) 前掲書 10), 379
- 32) 前掲書 10), 377

Representation of Death and Spirituality in Japanese Children's Literature:

Possibilities for Use of Picture Books in Spiritual Care

Emiko Ubukawa¹⁾ and Yoko Nakanishi²⁾

1) Gunma Prefectural College of Health Sciences

2) Gunma Prefectural College of Health Sciences (affiliation where work was completed)

Objectives: The objective of this paper is to determine how death and spirituality are represented in death-themed Japanese picture books published between 1967 and 2016, and if these books are potentially utilized in spiritual care to support both children and adults who are faced with their own death or who are grieving loved ones.

Methods: We investigated 53 picture books, which were gathered through an Internet search or from local libraries. Krippendorff's content analysis method was used for the analysis.

Results: Descriptive expressions about death and spirituality obtained from 53 picture books were divided into the following four categories showing ways the deceased are depicted: A) existence of being together, B) supernatural existence in another world (i.e., afterlife), C) existence of reincarnation, and D) educational suggestions about death. Data analysis of death-themed picture books showed that most of these books emphasize that death is not complete disappearance of the person and that there is a continued relationship between the deceased and the living. Moreover, such books potentially help both the dying and those grieving loved ones believe that the deceased exist in another world or are near to them even if they are not visible, thus providing relief.

Conclusion: These findings indicate that death-themed picture books are possibly effective and powerful tools to help both children and adults alleviate their grief and think positively about life and death as part of spiritual care.

Keywords: Japanese picture books, death, spirituality, spiritual care